weller Journal
特別号

【ヴェラージャーナル】**Special** Issue
令和2年5月10日発行
EditorToru Kikuchi (sioribi)
PublisherWeller Journal
Weller Journal©2020 禁・無断転載

書を読もう、家に居よう

いま、この本に寄せる想い

いまは、会いたいひとに会いたくても会えないとき。
その認識の正しさを、頭は理解しているけれど、心はひと恋しさを募らせる。
とみに増えたオンラインでの仕事やコミュニケーションは、
便利だし効率的だし合理性にあふれている。
あふれているはずなのに、「なにか大切なピースが欠けている」と感じるあの寂しさは、
いったいどこからやってくるのだろう。

願わくば、同じ空気を吸いたい。

そんないま、僕らを救ってくれるのは、一冊の本なのかもしれない。
言葉の向こうに書き手の生身の体温や、胸の鼓動を感じる、手触りのある本。
暮らしのヒントも、明日への叡智も、難局を凌ぐユーモアも、きっと、本が教えてくれる。

ひとを愛するあのひとたちは、いまどんな本を読んでいるのだろう。

2020年 初夏　菊地徹

---

title
乱歩名作集 1
著　者＝江戸川乱歩　発行年＝2018年
出版社＝グーテンベルク21
reader
アオイヤマダ ダンサー

家にいる時間。本は、時間があるから読むものではない。時間を作って読むものだ。と誰かから聞いたことがあるが、この自粛期間は本を読むことを肯定し、また、肯定できるものであった。

この期間、音楽は60年代、70年代、80年代のものをいろいろ聞いてみた。とくにお気に入りなのは〈ザ・ピーナッツ〉と〈*GARO*〉。映画もいろいろ見てみた。『緋牡丹博徒』や『ネバーエンディング・ストーリー』。お家時間を充実させようと、試行錯誤し、それぞれの時間を過ごしているみんなのインスタのストーリーや投稿。本や映画、音楽のおすすめを教えてくれる。

その中で見つけた江戸川乱歩の『人間椅子』。もしも椅子の中に人間がいたら。もしも私が椅子だったら。家の中にいる時間、いろんな感情にさせてくれそうな本。

家の中でも、人に会う時の、洋服を選ぶ時の、約束する時の、あの感覚を忘れないで欲しい。また、意識や身体がバラバラになるような、そんな今まで感じたことのなかった感情を呼び覚ますことも良いかもしれない。自分と作家と、時間を共有する楽しさを、改めて知ることができそう。

NEW

title
新しい日の真ん中に
著　者＝児玉由紀子　発行年＝2020年
出版社＝児玉由紀子
reader
赤木 遥 写真家

この本は〈*blackbird books*〉のオンラインで購入しました。本を買うときはお店の人の顔が浮かぶというか、「この人(のお店)から買いたい」という気持ちが強くて、なるべく好きな書店で買い物をしたいと思っています。写真集なら〈*book obscura*〉〈*BOOKS f3*〉をまず見よう、とか。知らない新しい本に会いたくなったら、〈*SUNNY BOY BOOKS*〉も〈流浪堂〉もいい、盛岡には〈*BOOKNERD*〉、松本には〈栞日〉がある。日本の各地に、面白い本屋さんがある。

私にとって書店は、本だけではなくてそこで生きている人に会いに行く場所です。あの人にもあの人にも会いたいなあ…。

コロナ禍と呼ばれる世界が始まる前、(写真を生業にし作品制作もしているので)いつでも何処へでも行けるし、行くのだと思っていました。今、そんな風には暮らせなくなってしまってとてもさみしいのですが、選んだ本の中にこんな一節があります。

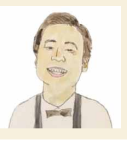
「ああそうだった僕は　どこ行ってもいいんだった」

ふとこれまで撮ってきた写真を見れば、会いたい人たちが写っていて、これまで訪ねたたくさんの風景が在って。写真の中でまた何処へでも行けるんだなと気がついて、なんだかやっていけそうだと視界が開ける感じがしました。

今回選んだ詩集「新しい日の真ん中に」は、小さくてかわいい、ささやかな喜びに満ちた本です。本の中でも、何処へでも行けますね。

---

title
悲しい話は終わりにしよう
著　者＝小嶋陽太郎　発行年＝2017年
出版社＝*KADOKAWA*
reader
安部 フミト 珈琲美学アベ　3代目マスター



彼と出会ったのは中学生の頃。お互いバスケットボール部で、近くの学校だからよく練習試合をしていました。高校では同じクラスになりお互いに顔見知りなので、打ち解けるのに時間はかからなかったと思います。

もちろん高校でもバスケットボール部に入部すると思い込んでいて、半ば強制的に彼と体験入部に行きました。学校の運動着と運動靴で先輩たちに鼓舞されながら走っている様子は、全身で入部を拒絶していました。笑

僕も、悪いことをしたなと今でも反省しています。

そんな彼は図書館の日の当たる隅っこの深い腰掛け椅子を定位置として、グレープバインをイヤホンからシャカシャカ漏らしながら、楽しそうに読書と妄想を繰り返している様子がいまでも目に浮かびます。高校２年生からはクラス替えがあり彼とはなかなか会わなくなりました。同じ大学に進学したと入学してから気付きました。

そして月日が流れる中、確か彼が大学４年生の頃に小説家になったと聞きました。周りの友人たちがこぞって彼の本を読んでいる中、僕も買って手元に置いてありましたが、なんだか気恥ずかしくて読めずにいました。

幸いにも、今僕には時間があります。

この機会に、初夏の空気で甘酸っぱい青春時代に転生した気持ちになってみるのも一興かなとどこか吹っ切れています。松本で生まれ、松本で育った小説家の本はきっと、松本の皆さんにとって感情移入しやすい場面設定なはず！

(まだ読んでない)

---

title
幸福論
著　者＝アラン　発行年＝2014年
出版社＝日経*BP*社
reader
小田桐 奨 美術作家(*L. PACK*)

このお話をいただいて、身の回りにある積読に手を伸ばしてみました。その中で一番初めに手を取ったものがアランの『幸福論』でした。

『幸福論』自体は古くから読まれている名著ですが、2014年に出版されたこちらの新訳書は、一冊を通してアーティストの平山昌尚さんのイラストレーションが使われていて、気取らずに読み進める事ができます。この年、平山さんと一緒に『はてな弁当』という開けてみないと中身が分からないお弁当を一緒に作ったので、とても記憶に残っています。

久しぶりにページを開くと前書きが素晴らしいことに気づきます。

「この本は自分でも気に入っています」

なんだか嬉しくなって続きが読みたくなりますよね。

全体は93のエッセーで構成されています。この『幸福論』はフランスの新聞の連載としてスタートし、1906年からは毎日書いていてその数は5,000を超えると言われています。二つの世界大戦を経験し、激動の時代を生き抜いたアランの言葉は、2020年に社会変革を迎えた僕たちにとっても響く言葉が詰まっています。本に出てくる僕が好きな言葉は「楽しめることが能力の証である」です。どんな状況でも楽しんでいきたいですね。

---

title
新編 不穏の書、断章
著　者＝フェルナンド・ペソア(澤田直 訳)　発行年＝2013年
出版社＝平凡社
reader
金井 直 大学教員

評判の新刊、パオロ・ジョルダーノの『コロナの時代の僕ら』(2月末から３月初めにイタリアで執筆。日本語版は4月20日刊行)をすぐに買って読んだ。が、ほんの2ヶ月弱で話の大枠や細部がすっかり過去の出来事や感情になってしまっていて、そこから生じる温度差が、むしろ感染症の非線形の動きを切実に伝えてしまう気がした。コロナの時代の奇妙な読書経験だった。文中、ジョン・ダンの「誰もひとつの島ではない」という詩句が引用されているのだが、これもいささか反語的に響いた。人間としては、どんなときにもほどよい繋がりを他者と保って、いわば群島(アルキペラゴ)風の生き方を目指したいものではあるが、今はどうなのだろう。我々はむしろひとつの島であることを、外からくりかえし求められ、内からも強いてはいないだろうか。そう思ったとき浮かんだのがペソアだ。

『不穏の書、断章』を取り出して頁を開けば、あった。「私たちは人生という大海に浮かぶ島なのだ。私たちのあいだには海が流れ、互いを限定し、隔てている」。フェルナンド・ペソア(1888-1935)はポルトガルの詩人。事務仕事の傍ら、アルベルト・カエイロ、リカルド・レイス、アルヴァロ・デ・カンポスなど数多くの異名(筆名・偽名ではなく…)を用い、著述・詩作をおこなったが、そのほとんどは生前刊行されず、一般的には無名のままだった。そんな彼はリスボンから出ない。「旅をすると考えただけで吐き気がする」のだから。旅は嫌い。そして読書がすべてを追い抜いていく。「読書も旅行と同じだし、その他のこともみな読書と同じだ」。だから読む。

70以上の異名を使いこなした彼は、いわば、ひとつの島の内に群島を抱えて、生き、書いた人なのだろう。リスボンに閉じこもった詩人の平時の強靭さに、私は、いまちょっと憧れている。

---

title
智恵子の紙繪
著　者＝高村豊周 編　発行年＝1965年
出版社＝社会思想社
reader
金井 三和 造形作家

「ことば」にはとても助けられているはずなのにあまりにも多くの「言葉」を目の前にすると時としてとても疲れてしまうことがある。頭の中は言葉でいっぱいになり、まるで言葉たちがおしくらまんじゅうをしているかのよう。

そんな時、私の頭の中を少しだけ風通しよくしてくれるのは、自然や動物、そして子供とのふれあい。本で言えば、写真集、絵本、画集のたぐいかな。理屈とは遠い遠い世界にいる彼らの存在は、私の頭のなかを空っぽにしてくれる。

「智恵子の紙繪」もそんな時に手にとる一冊。

ゆっくりと本のページを一枚一枚めくってみる。丁寧に切り抜かれた切り絵のひとつひとつを、智恵子はどんな思いで切っていたのだろう？どんな時間に切っていたのだろう？そしてだれのために切っていたのだろう？

本の目次にはひらがなで、「はな　くさ・き　くだもの　やさい　さかな　たべもの　くらし　かたち」とある。「東京には空が無い」とつぶやいた智恵子にとって、「ほんとうの空」とはどんな空だったのだろう？私のなかで、「ことば」が「言葉」になる準備がゆっくりとできてきたような気がする。

大きくひと呼吸して、わたし自身の空を求めて、次は「言葉」の本とじっくりと向かいあってみたい。

---

title
美しい街
著　者＝尾形亀之助　発行年＝2017年
出版社＝夏葉社
reader
菊地 徹 栞日代表、企画・編集・執筆

「何度も、読み返される本を。」を社是に掲げ「まさしく」と唸る本だけをつくり続ける出版社〈夏葉社〉が、３年前の冬に刊行した詩集。戦前の詩人、尾形亀之助の全詩作から55編を精選した一冊は、同社代表の島田潤一郎さんが、その帯文に「特別な詩人」と添え、同社*WEB*サイトで「凛とした孤独がある」「読む人の孤独を支えてくれるような詩」と評す。

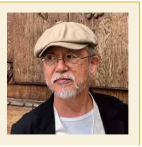
「街よ／私はお前が好きなのだ／ お前と口ひとつきかなかったようなもの足りなさを感じて帰るのは実にいやなのだ／妙に街に居にくくなっていそいで電車に飛び乗るようなことは堪えられなくさびしい／街よ／私はお前の電燈の花が一つ欲しい」

表題詩『美しい街』を、この街の本屋〈*books* 電線の鳥〉店主、原山聡矢さんが朗々と詠みあげたのは、今年１月に開催した「*Matumoto Winter Walker* 2020」オープニングパーティーでのこと。冬の街を歩き店々を巡るこのスタンプラリー企画は、この冬が７回目の開催で同店は前々回からの参加店。日頃から音楽を愛し、歌を唄う原山さんが「菊地さん、テーマソングができました」と云って訪ねて来てくれたのも、前々回の開催期間中だった。いまや馴染みの名曲『次の角を曲がろうか』を今年のオープニングでも披露してくださり、その歌唱の直前に「先日、栞日で出会いました」と、『美しい街』を朗読してくれたのだ。あのときは、まさかその数ヶ月後に、この街から人影が消えることなど、誰も予想だにしなかった。今期のクロージングパーティーは、いまだ開催できずにいる。

「街よ、私はお前が好きなのだ」。いつしかそらんじていた冒頭を口からこぼした自分に気付き、僕は書架から『美しい街』を取る。控えめで、それ故この詩集に相応しい判型と色味と佇まい。孤高の詩人の言葉と向き合う。眼を閉じる。深く息を吸う。吐く。よし、と頷き、眼を開ける。この孤独の中でこそ生まれる答えに光をあてよう。この僕らの美しい街に、あした灯す電燈の花を、ひとつずつ、ひとつずつ、こしらえていこう。

---

title
豊島與志雄童話全集第３巻「コーカサスの鷲」
著　者＝豊島與志雄　発行年＝1948年　出版社＝八雲書店
reader
串田 和美 俳優、演出家、舞台美術家、まつもと市民芸術館芸術監督、*TC*アルプ主宰



この本はもうかれこれ70年ほど前に、つまり僕が小学校に上がるかその少し前に、父親の孫一さんが買ってくれた童話の一冊です。そして子供の頃与えられた記憶に残っている何冊かの本の中で、どういうわけかこの本だけがずっと僕の手元にあるのです。まるで僕の人生の中の、うまく説明できない何か大切なものをこっそり守っているお守りのように。ところが終戦から３年頃の本ですから、紙の質が相当悪く、今ではページをめくる度にまるで薄いウエファースで作られた紙のようにパラパラと崩れていくのです。いつの日か乾いた砂のようにさらさらと消えていくのかもしれません。

「それはもったいない。いよいよ読むことができなくなる前にちゃんとコピーをしておいた方が良い」と周りの人は言うのですが、僕もそうしようとも思うのですが、しかしそんなことをして本当に良いのだろうか？というちょっと奇妙な想いが僕を支配するのです。

本というものも、実は消えていくものなのかもしれないと思うと、なんとも言えなく嬉しくなるのです。図らずもこの本におさめられた13編の童話のいくつかはそのことをそっと教えているように感じます。

豊島與志雄という人は『レ・ミゼラブル』を最初に翻訳した人として知られています。また彼が本格的に書いていた憂鬱感に包まれたような幻想小説は久米正雄、谷崎潤一郎、芥川龍之介、川端康成、太宰治、坂口安吾ら大勢の作家に感銘を与えたそうです。

この本も『豊島與志雄童話集第３巻』とあるのですから、１巻も２巻も多分４巻も５巻もあったのでしょう。ひょっとして今や別の形で出版されているのかもしれない。なんとか探し出して読みたいという逸る気持ちと同時に、そんなことをしなくていいという、自分でもじれったくなるような妙な感情に包まれるのでした。

---

title
みんなちさこの思うがままさ
著　者＝池田知佐子　発行年＝2013年
出版社＝山と渓谷社
reader
小杉 敬 株式会社ゼインアーツ代表取締役

登山ブームも徐々に陰りが見え始め、メジャーなアウトドアメーカーのブランド力が絶対的では無いと確信した市場の転換期。業界全体に不穏な空気が流れ始めたのを機に、私は長年従事していたアウトドア業界との向き合い方を見直そうとしていた。「私が今業界にできる事は何か？」「私のスキルは具体的に何なのか？」「私は誰に何を伝えたいのか？」「私はそもそもアウトドアの本質を理解しているのか？」考えれば考えるほど深みにハマっていく思考の沼の中、まるで導かれる様に手にしたのがこの本だった。

『みんなちさこの思うがままさ』は、1999年に急逝した池田知沙子さんが、所属していた山岳会の山行報告や山岳雑誌に寄稿した文章をまとめた遺稿集である。

私も過去、山岳会に所属していた経験があり、山行報告は何度か書いた事はあるが、報告という言葉通り、山行ルートの難易度や環境、コースタイムなどの情報を記すものが一般的である。しかし、この本はそういった類のものではなく、山を愛おしく想う気持ちが純粋無垢に綴られた、山行報告という名の叙情詩であった。

作為のない透明な言葉のひとつひとつに魅了され、ページをめくる毎に彼女の人となりや人生を想い、ひとりの山好きの美しくも儚い一生に切ない感情が湧き上がる。「あー、自分もこういう風に山と向き合いたかったのだ」と気づいた時、私がこの時一番欲しかったアウトドアの本質が鮮明に見えた。

今、私の中で原動力となっている業界への使命感は、この本で教えられた事が源となり、明確な指針となって迷い無く前に進む事ができている。

---

title
仕事と日々・夢想と夜々ー哲学的対話
著　者＝ジャンケレヴィッチ(仲沢紀雄 訳)　発行年＝1982年
出版社＝みすず書房
reader
権頭 真由 音楽家(3日満月)

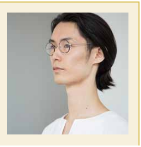
ふと口ずさんだメロディが、誰の何という曲かおもいだせないままピアノに向かい、息を整えることもなく弾き始めると、どうしてだか自然と手が流れるように和声をはじきだし、つくづく美しいとため息をつきながら、でもどうして弾けるのだろうと思案するうちに、手と心は結ばれながら幼少期の一風景へと誘われ、ああ　たしか日曜日にパンを食べながらお父さんが*CD*でかけてくれたのがこの曲だった気がするなあなどと、少しやわらかな光に包まれたようなお昼どきを美化しながら懐古するうちに、だんだんとその名前もおもいだせない曲が曖昧になっていき、お母さんが焼く食パンはたまに失敗してイースト菌のにおいがきつい感じだったなあとにやにやするころにはもう曲は、拍子と調と雰囲気こそ受け継ぎつつもわたしの手癖にまみれた即興曲に変化していき、できるかぎり美しい響きで終えようと、意識を次に弾かれる音へ、次に弾かれる音へと駆り立ててゆき、自分で決めた終わりで終える。

それは正午から数分間(世界が新たに装いを変える魔法の数分間)のできごとであったということが、音楽とはなにかを子どもや愛する人たち、猫や貝殻に物語りするときに、とても大事であると確信させてくれたのはこの本です。

だけどとっても難しくって、ずっと読み続けています。生活を共にしている一冊です。夜ごとわたしは、矛盾や謎、哀しい記憶、あやふやなことであふれたすべての瞬間をもぐもぐ食べながら養分にして夢想するんだ！それで、できるだけ多くのいきものや、ものや出来事ができるだけしあわせでありますようにとお祈りするんだ！

---

title
変調「日本の古典」講義　身体で読む伝統・教養・知性
著　者＝安田登、内田樹　発行年＝2017年　出版社＝祥伝社
reader
佐藤 公哉 音楽家(3日満月)



この企画のお話をいただいた日に、ちょうど読み終わった本です。コロナで仕事がほぼ全て飛んでしまい、本を沢山読んでおこうと、近くの図書館で借りたうちの一冊でした。

能のシテ方を学んでおられる武道家・思想家の内田樹さんと、能楽師の安田登さんとの対談。「能」や「論語」といった大体の主軸はあるのですが、「楽しく変な話をする」というコンセプトの元に(？)話がどんどん跳躍していき、それが何とも気持ちの良いグルーヴです。

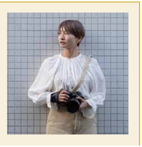
650年続くと言われる能楽、その黎明期となる室町時代の話が出たかと思えば、源平の戦い、万葉集、神話の時代、果ては古代中国、古代メソポタミアまで縦横無尽に「変な話」が展開します。眉唾ものの匂いもかなりしますが(笑)、お二人の含蓄深さ、古典文化の奥深さに終始圧倒され、読み終えてしまうのが寂しい…もっと読んでいたい…と思いながら一気に読み終えました。

「能楽はサンプリングを駆使して作られている。謡(うたい)はラップだった。」「六義園(東京都の庭園)は、和歌による四次元*AR*(拡張現実)体験を狙って作られている。」などなど、次から次へとハッとさせられながらも、到底深い理解には及びません。いつかしっかりと「身体化された教養(この本の章のテーマのひとつ)」を身につけ、もう一度読んでみたいと思っています。

以前一度だけ安田登さんの謡(うたい)を間近で体感したことがありますが、改めて「また触れてみたい！」「ワークショップにも参加したい！」と強く思いつつ、しばらくは本や *YouTube*で我慢でしょうか。内田樹さんによる序文に「若い人たち(できたら中学生や高校生)に読んで欲しい。」とありますが、僕も同じように思います。

---

title
ku:nel クウネル　2002年4月1日号(an・an増刊)
著　者＝　発行年＝2002年　出版社＝マガジンハウス
reader
清水 美由紀 フォトグラファー



最近本を読んでいない。

子供の頃から本好きで、小学生の頃には図書館での年間貸出冊数学年１位になったこともある。学生の頃は書店で何時間も立ち読みをしていられたし、新卒で入社した会社も書店。とにかく生まれてからずっと、活字を追って生きてきたと思う。それが、娘が生まれてからこのかた、小説はほとんど読まなくなった。雑誌も写真を眺めるだけで、私の積読が開かれることはない。小さな子供がいて仕事しているのだからそんなものかもしれない。

今の私にとって本とはなんだろう。スマホひとつで情報収集ができる。動画のコンテンツも溢れている。その中で本を開くのはどういう時か。騒がしい日常の中で「心を緩めたいとき」なんじゃないだろうか。大好きな本はいつでも心を緩めさせ、心の潤いとインスピレーションをくれる。

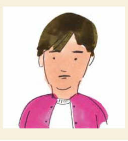
手元に古い『*ku:nel*』がある。月刊誌になる前の、『*an*・*an*』増刊のもので、表紙には「ここから始まる私の生活。」「風の通る部屋」と言った見出しが並ぶ。発行は2002年。もう18年も前の雑誌だ。

ページをめくると、大学を卒業して新社会人となり、不安ながらも期待に胸を膨らませていた日々が蘇る。目の前に桜並木のある小さなアパートで、窓からは大家さんの庭の大きな木が見えた。自分好みの部屋にしたくて少ない予算の中であれこれ工夫した。私の好みは、あの頃からほとんど変わっていない、そんな風に感じる。あの頃、蚤の市で買った陶器の持ち手がついたカゴは、今だって部屋の特等席に置かれているし、雑誌の中の誰かの暮らしが映った写真の、その光景に今だって胸が高鳴るんだから。

あるページに書かれた言葉に目がとまる。「豊かな暮らしとは自分の心の中にあるもの」誰かの真似をするんじゃなくて、ないものねだりをするんじゃなくて、だからと言って諦めるのではなく。自分の大切なものの純度を曇らせることなく生きていきたい。色褪せることのないこの雑誌を前に、これからの指針を再確認したように思う。

---

title
ぼくらの民主主義なんだぜ
著　者＝高橋源一郎　発行年＝2015年
出版社＝朝日新聞出版
reader
友野 可奈子 イラストレーター(*ZING*)



2019年は、腑に落ちないニュース、そこから派生するダラダラとしたどうしようもない情報、「ほんとにもやもやするなっ！」と行き着く先もない、マッチでシュッと火をつけたような怒りが、たくさんあったように思えます。そんなモヤモヤとした生活の中でも、『すっぴん』というラジオ番組を聴く時間は自分にとっていい時間で(2020年3月中旬ごろに惜しくも終了してしまったのが今でも寂しい…)金曜日の高橋源一郎さんの回は特に楽しみにしていました。もともと家にいる時間が多く、12月末にはふたりめを出産して「また引きこもるかぁ」とあまり外に出ない生活を楽しんでいたところ、いつの間にか社会全体が引きこもる生活に変わっていて、３月に入ると休校になったこどもリスナーが「初めてリアルタイムで聞けています！」と投稿し、それを拾ってくれるような状況が多くなり、気がつけば『すっぴん』も終わっていました。そんな期間の中で中学生の男の子から、以前、高橋源一郎が推薦した本を読んだ、という投稿があり、それが『僕らの民主主義なんだぜ』でした。「いいタイトルだなぁ」と素直に思いました。しかしその一方で民主主義って何だろうと32歳の自分は思い、でもこの先も民主主義であってほしいと思ったり、でもこんな民主主義の社会もつらいなぁと思ったり、果たして民主主義って一体何なんだろうと、今まで勉強してこなかった自分にぶち当たったのです。内田樹さんが「民主主義は、市民の相当数が『成熟した市民』、つまり『大人』でなければ機能しないシステムだからです」と言っているのが心に突き刺さり、とっさに産み落としてしまったふたりのこどものことも脳裏に浮かびました。今まで知らなかったこと、気になっていたことに少しでもいいから歩み寄り、説明は苦手なのでとにかく先ずは自分でイメージできるように、まずは私の最近気になる作家のこの本を読んでみようと思っています。

---

title
「北の国から」異聞
著　者＝倉本聰　発行年＝2018年
出版社＝講談社
reader
中島 孝介 *guild Nemuro*、*guild Bekkan* 店主

『「北の国から」異聞』、タイトルを見た瞬間「買わなきゃ！」と条件反射的に購入したこの本。「北の国から」を人生の教科書として崇めている僕にとっては買わない理由が無い本でした。

「北の国から」は1981年～1982年の2年間放送されたドラマ(ドラマスペシャルは1983年～2002年)、味のある登場人物と北海道の雄大な自然の中で繰り広げられる毎回ハラハラする話の展開、今見ても色褪せない名作ドラマです。僕は北海道に住んでいた事もあり内容に親近感が湧き、苦難に遭いながらも逞しく生きる人々の姿に励まされ、生きる活力を与えてくれる作品です。

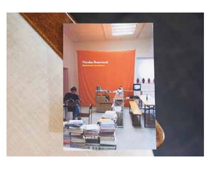
主人公の黒板五郎(以下：五郎さん)が「北の国から」以後の事をインタビュー形式で語っているこの本は、ドラマ以降の明かされていなかった話や裏話など「北の国から」愛好者にはたまらない情報もあり、五郎さんの人柄も文章から感じ取れる本でした。

ただ面白く読めるだけでなく五郎さんの物事の考え方や行いから考えさせられる事柄もあります。

例えば、金銭的に貧しい黒板家は食べ物を調達する術として農協から製品にならない規格外の野菜をもらったり、生産調整で廃棄予定の牛乳を貰いバターを作り、拾ったり貰うことで結果的に廃棄されるはずだった食べ物を無駄にする事なく消費しています。

食べ物に限らず生活を取り巻く身の回りにあるものを粗末にしていないか、物質的に豊かな社会で生きている今、本当に物を大切にする事が出来ているのか、本当の豊かさとは何なのか。そんな問いかけを五郎さんにされている気がします。

物に対しての姿勢以外にも、人に対しての姿勢、自然に対しての姿勢、命に対しての姿勢、「北の国から」の世界から学べる事はとても多く、現代社会の中での生き方を省みるきっかけにもなるのではないかと思います。



title
Relational Aesthetics
著　者＝*Nicolas Bourriaud*　発行年＝1998年
出版社＝*Les Presse Du Reel*
reader
中嶋 哲矢 美術作家(*L. PACK*)

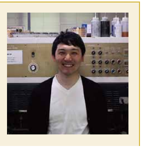
翻訳が出る出ると言われ続け早数年。まだちゃんと出ないのかと思いつつ時々この本を読んでいる。とは言っても全文英語、そして専門用語、知らない国の歴史的背景や哲学が入り混じり頭の中には全然入ってこない。久しぶりに読んで見たら意味がわからなくまた最初から読み直す、と言った具合で一向に読了にはならないのだ。すっかり読み終わらないという点ではこの本は「漫画」に似ている。家の本棚には麦わら帽子を被った海賊の漫画があるのだけど、この漫画も中学か高校の時から読み続けていて、同じ巻を何度も読んでいると妻に笑われている。単純に読み飽きなくて読んでいるだけなのだが、最初の巻なんかは20年も昔に出たもんだから、読んでいる時にふと青春時代を思い出したりもする(あ、この時に主人公が言ってた言葉流行ったなあとか。友人とコンビニで立ち読みしたなあとか)。思い出すのは他愛も無い記憶なのだが、この漫画が一種のアナログな記憶想起装置となってる点では少しは役に立っているのかもしれない。

さて、「関係性の美学」について綴られている(と言われている)この本。記述背景はさておき「関係性の美しさ」という言葉だけを抽出すれば、この言葉を意識する機会としては今は最適な気がする。フィジカルで会うことが気軽ではないからこそ、普段の暮らしのあり方なんかを日々考えざるを得ない。買い物はなるべく顔が見える人から買うとか、友人に手紙を送ってみたり、両親に頻繁に電話したり、今まで以上に関係について意識し始めてきた。この意識が当たり前になることが僕にとってのしばらくの目標だ。

近年珍しく時間が有り余っているしこの時期を忘れないように難しい本も再び読んでみるとしようかな。

---

title
世界観をつくる
著　者＝水野学、山口周　発行年＝2020年
出版社＝朝日新聞出版
reader
藤原 隆充 藤原印刷 三代目



友人を通して、著者の水野学さんがコロナ禍で大切な人のために”*give*”の行動を続けていることを知り、書を手に取りました。

外出自粛によりサービス産業は総崩れ。サービス業以外も前輪駆動型で内部留保を貯めずに投資へ回していた企業は一気に逆風となり危機的状況です。この教訓がどう活かされるかを考えると、企業はこれまで以上に内部留保を貯める傾向に向かっていくと思われます。つまり、目先の計算できる儲かるビジネスを優先し、リスクの大きい新しいことや面白いことへの投資が減っていきます。

果たして、それでいいのだろうか。ぼくらがつくる今は、子どもたちの未来です。つくりたい未来はそうじゃないはず。本書には「役に立つという価値」と「意味があるという価値」のふたつの価値が存在し、「役に立つ＝文明」「意味がある＝文化」と言い換えることができる、とあります。歴史から文化は文明を後追いすることが分かっています。

大航海時代(文明)→ルネサンス(文化)→産業革命(文明)→アーツ＆クラフツ運動(文化)→インターネット(文明)、そして今です。

順番的には文化のターンで兆しも少しずつ生まれつつあったが、冷たい雨のように新たな芽が潰されてしまうかもしれない。経営者という立場でどこまで理想を追い続けられるか。一介の中小企業にすぎないが、自分はそうはなりたくないと勇気を振り絞り、前を向くためにこの本を読んでいます。

---

title
憎しみに抗って ―不純なものへの賛歌
著　者＝カロリン・エムケ　発行年＝2018年
出版社＝みすず書房
reader
分藤 大翼 人類学者

自分を守るために他人を傷つける。このなんとも哀れな言動は何とかならないものだろうか。他人を傷つける人は、おうおうにして、それが自分を守るためだということに気が付いていない。つまり、自分の言動を疑うのではなく信じることで自分を守ろうとしているのだ。確かに、信じることは易しく、疑うことは難しい。正しく疑うためには、正しく知る必要がある。そのためには学ぶこと、たとえば優れた本を読む必要がある。

ただ、もとはといえば、そんな必要はなかった。そもそも、人は「守り・守られ」ながら生きるのが当たり前だった。当たり前だった世の中がひっくり返りつつあるのだから、不安なのはしかたがない。今の世を生きる人は誰しも不安だ。もとの通りとはいかないまでも、他人を傷つけるほどの不安をやわらげる方法はないものだろうか。自分が守られていないから他人を守らない、自分が傷つけられたから他人を傷つけるという恐ろしく単純な負の連鎖を正すためには、他人を守らなければ、自分が守られることもないという、そもそもの世の理を踏まえる必要がある。そうすれば、他人を傷つけず、いくらかでも安心して生きる方法が見つかるはずだ。

本書のはじめには次のような一節が記されている。「憎しみに立ち向かうただひとつの方法は、憎む者たちに欠けている姿勢をとることだ。つまり、正確に観察すること、差異を明確にし、自分を疑うのを決してやめないこと」。そして、すでに憎しみにさらされ、孤立している人に、どのように接すればよいのかという点については、「彼らをひとりにしないことだ。彼らが呼び掛けたら、その言葉に耳を傾けることだ」と著者は述べている。時に難しいことがあっても、できないことではないはずだ。いや、きっとできるはずだ。それは信じてよいことではないだろうか。

---

title
十二国記「白銀の墟 玄の月」
著　者＝小野不由美　発行年＝2019年
出版社＝新潮社
reader
蒔田 友之 *Chez Momo* 代表

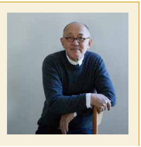
「十二国記」と言うシリーズの最終巻と言うことになっていますが、新刊が出たのが昨年の10月でその前が、確か2001年(「外伝」を除く)でしたので、実に18年ぶりの新刊でした。当時はまだ21才で、一言で言えばシリーズにどハマりしていて、その世界観や設定に心惹かれ、キャラクターの考え方にはかなり影響を受けている気がします。新刊発売の際には、18年ぶりですから他のファンも随分熱心に盛り上げて、古いお話も読み返し、久しぶりに楽しく本を読んだな。と思ったものでした。

人生の半分位を共に過ごしているような本は思い返してもそんなにないと思うので、やはり好きな本(シリーズ)なのだなと思います。*SF*ですから当然、そんな事ありえんわ。と言う事ばかり起こりますが、我々の日常と何かリンクする思想感、哲学がそこにあり、*SF*だからありなんだな。では終わらない自分の考え方に影響を与えてくる本だと思います。

気持ちの良い話ばかりではなくて、どちらかと言えば、話の半分はモヤモヤつらい気持ちになる事が多いシリーズですが、その分、余計に共感が深いのかも。結末に近づいていくにつれ、主人公の成長、話の展開の壮大さに心打たれて、納得。とにかく納得したくて読んでる所がある気もする。一応完結しているようですが、多分また何か出る気がして、今後も楽しみにしています。

---

title
清浄なる精神
著　者＝内山節　発行年＝2009年
出版社＝信濃毎日新聞社
reader
三谷 龍二 木工デザイナー



2018年、「このまちに暮らすこと。」というタイトルで、本屋の菊地さんと中川さん、木工の前田さん、ガラス作家の永木さん、そして私の５人で、ローカルを考える機会を持ちました(*Open MUJI*)。その中で私たちが考えていたことは、消費経済や情報社会のなかにいて、個人のリアルな世界が稀薄になり、かつて地域に当たり前にあった生活世界が空洞化していっているのではないか、ということでした。それを回復する手がかりとして、人と人が具体的に接する「地域」や、工芸のようにものに触れ、手を動かすような具体的なものを考えた。そして自分たちが気持ちのよく「生きられる場所」はどのようなものなのかを探したいと思ったのでした。

この本で内山節さんはローカルのことをこのように語っています。「ローカルとは地域を意味したが、今日は地域を地域たらしめている重層的な関係の方に向いている。つまりローカリズムは関係の世界の中で生きるという意味であり、地図上の地域を意味しない」。単に同じまちに住んでいるとか、都市に対するローカルとか、そうした表面的な事実から離れ、内山節さんはローカルの意味を「自然」「宗教」「戦争」「貨幣」「労働」「国家」「家族」など、まさに重層的に考察していきます。同じ地域に暮らすものが、一緒に楽しみ、一緒に考え、相互に思うこと。そうした「重層的な関係」を豊かにすることが、自分たちが生きられる場所を作ることになるのです。「人間のローカル性を無視した経済は、長期的にはうまくいかない。多くの人たちが働くことに夢を失っている現状は、私には、このことを十分に考えてこなかった結果であるように思える。日本の伝統的精神は、労働に経済を超えた価値を見出してきたのである」。

この本は信濃毎日新聞に連載された「風土と哲学ー日本民衆思想の基底へ」(2007年～2008年)を単行本として纏めたものですので、読まれた方も多くいらっしゃると思います。私はこの本を読みながら、実際に「地図上の地域」を共有する人たちと、このように重層的な視点を持って「このまちに暮らすこと」を考えていけたらと思い、取り上げさせてもらいました。

---

title
日本文学全集
著　者＝池澤夏樹 個人編集　発行年＝2016年
出版社＝河出書房新社
reader
宮澤 勇 群青代表

このところ、文化芸術また種々に於いての *Y*師匠からのおすすめで池澤夏樹個人編集の『日本文学全集』を仕事も終えてごろんと床に就いたころ読むことが多くなりました。なによりも現代作家の方々が現代語で訳しておられるので、とても分かりやすく馴染みやすくくすくすと笑ってしまうほどです。散文はメールのようであり短歌はラインのようなのです。今や文(ふみ)はスマホに変わりました。文は季節の花や木に結ばれて恋の相手に送られたそうですが、メールやラインには気持ちを表した絵文字が送られるようになりました。いかに少ない言の葉を行として創り出すかは今も千年前も変わりないのでしょうか。

日本初の壮大な物語『竹取物語』では訳者の森見登美彦さんによって生々しく描かれた宇宙人の月の姫にうごうごと求愛し惨敗する皇子ら。その失敗のようすが現代語に変わって今も使われていることがすごく楽しい。『伊勢物語』では訳者、川上弘美さんはきっと僕と同じでこの男、業平(なりひら)が大好きなんだと思う。業平は男に対しても女に対しても社会に対してもとても優しいし格好いい。『枕草子』は酒井順子さんによって訳されたインスタグラムのようです。清少納言って名前も素敵ですが、この方の知性や感性は物凄い！スーパーです！訳者の力もよくよく感じられる傑作です。そして高橋源一郎さん訳の日本初の災害文学『方丈記』。失礼かもしれないですがツイートされたように分かりやすい訳です。災害のあと人々は言った、俺たちは目が覚めたんだと、人々は変わった、という一文が心に残ります。そして冒頭文の美しさは古典文学で一、二を争う名文と云われ、また僅か３メートル四方の方丈の庵で執筆されたそうです。

以上の４作品は『日本文学全集 03』『日本文学全集 07』からの抜粋です。なぜこれらの作品にこうも惹かれるのか。それは、作者は自身に、訳者は作者に、美しいほどに誠実だから、と僕は昨年処暑のころから思い続けております。

---

title
断片的なものの社会学
著　者＝岸政彦　発行年＝2015年
出版社＝朝日出版社
reader
武者 忠彦 信州大学経法学部

このところ、巷では”*social distance*”という言葉を頻繁に耳にする。”*social*”な距離とはどのくらいだろう。ある文化人類学者による定義によれば、それは”*public*”と”*personal*”のあいだで、「相手に手が届かない安心できる距離」だという。たとえば周りにそういう距離感のひとはいるだろうか。

かれこれ20年ぐらい読んでいたブログがある。関西圏に住む当時高校生の小沢健二が好きな女子で、日々の出来事や友達関係の悩みなどが長々と、誰に向けられるでもなく綴られていた。たまに付けられるどうでもいい近所の携帯写真も良かった。ところが、20代半ばぐらいからひどく内容が攻撃的になり、周りの人間に対する暴言も多くなった。なぜだか、ひどく心配した。今思えば、統合失調症か何かだったのだろう。30代にさしかかる頃になると、再び平穏な日常を取り戻し、33歳で同じ写真が趣味の男性と結婚した。今では数ヶ月に一度ぐらいしか更新されないが、たまに見にいっては、無事に生きていることを確認して安心している。僕にとって彼女は、近くて遠い”*social*”な存在である。

昨晩、読み直した『断片的なものの社会学』の著者である岸政彦もまた、こうした断片的な人生の断片的な語りのマニアである。ただし、岸はそれらを民衆文学として称揚せず、芸術的な価値もないという。そして、だからこその美しさを指摘する。「徹底的に世俗的で、徹底的に孤独で、徹底的に膨大なこのすばらしい語りたちの美しさは、一つひとつの語りが無意味であることによって可能になっている」という一節に、かつての僕の無意味なネットサーフィン(死語)の時間も救われるのである。

---

title
THIS IS THE AMERICAN EARTH
著　者＝*ANSEL ADAMS*　発行年＝1960年
出版社＝*Bulfinch*
reader
矢口 正和 *SELECT SHOP ANOTHER LOUNGE* 店主

自然の警告か？人間の過ちか？姿の見えないウィルスの脅威に直面している今の世界。経済を中心に成長してきた人の営み全てがあっという間の時間で機能をなくした人間社会。

そんな今、”*This, as citizens, we all inherit. This is our, to love and live upon, and use wisely down all the generations of the future.*”の一文から始まるこの写真集を見たくなり書棚を探した。

原始の姿が残るアメリカの大自然、人が自然を壊し作り出した近代の建造物、そしてアメリカ各地の人々の姿。精細にして美しいモノクロ写真とそれに添えられた写真家アンセル・アダムスのメッセージ。

まさに今、人に課せられたこれからの生き方、これからの価値観の模索。この本が発行された1960年、自然と対峙し、その畏敬の存在を写し続けた写真家アンセル・アダムスは、現代人が直面している天地がひっくり返るようなこの出来事がいつかの後世に起こるであろうと気がついていたのだろうか？

そんな空想論を思い浮かべながら、私が生まれる前のアメリカの姿を久しぶりに眺めた。とても美しく、尊きメッセージが添えられた写真集を。

---

title
野中モモの「ZINE」　小さなわたしのメディアを作る
著　者＝野中モモ　発行年＝2020年　出版社＝晶文社
reader
吉田 朝麻 ミュージシャン、デザイナー(*ZING*)

この本は松本のレコードショップ〈*MARKING RECORDS*〉の *RIKO*ちゃんのインスタで紹介されているのを見てすぐに購入しました。

自分がイラストレーターの友野可奈子さんと2012年から活動している〈*ZING*(ジング)〉というユニットではこの本にもある自分で作る小さなメディア *ZINE*(ジン)への魅力を探るための場を作ったり、きっかけを作ったりする活動をずっとやっていて、自分も含め、いろんな人が作りはじめたり、場所が違ったりする事でその魅力は可変的で途切れる事が無いなとつくづく感じています。この本はそんな *ZINE*について野中さん自身の幼少から現在に至るまでの活動を通して紐解いていく内容になっていてとても面白いし、共感できる部分と発見があります。単にスタイリッシュやオシャレなものとしてではなく「自分の小さな活動」としての *ZINE*の在り方は自分自身がいろんな活動を通して大切にしている事ととてもリンクするなと思います。そして、このコロナウイルスの影響の中で「日常」というものが揺らいでしまっている今だからこそ内なるものを自分なりに表出し伝える事ができる *ZINE*の可能性を捉え直すきっかけをもらったような気がします。

〈*ZING*〉でもこの状況をむしろ *ZINE*の力でクリエイティブに変えて行く事はできないかと思い、いつもワークショップで使用しているオリジナルの「*ZINE KIT*(ジンキット)」に友野さんの素敵なイラスト素材を付けた特別仕様のキットをオンラインショップで販売しはじめました。家の中にいなくてはいけないこの状況を逆手にインプットした事をまたアウトプットできる相乗効果に繋がればと思います。

---

title
佐々木正美の子育て百科
著　者＝佐々木正美　発行年＝2018年
出版社＝大和書房
reader
米山 知歩 こぎん刺し作家(*fuku fuku*)

ここ数年、まだ幼い子供たちと過ごす時間に追われて、完全に読書離れをしている自分にご紹介できる本などあるのだろうか？と思わず考え込んでしまいましたが、そんな私にも最近夢中になって読み続けている分野の本がありました。それは育児に関する本です。

図書館に行く度に何かしらの育児本を借り、それを返却する時にはまた別の育児本を借りてしまうほどです。繰り返し読みたい本は迷わず購入し、お守りのように側に置いておくようにもなりました。今回ご紹介する一冊も、そんなお守り的存在です。

過去５年間に２度の妊娠・出産を経て率直に思ったことは「私って、子どもについての知識が全くない！」でした。子育てに直面すると、毎日がわからないことだらけ、想定外の出来事の連続で、その度に答え合わせをするかのように様々な本を開いていました。必要に迫られ読み始めた育児本ですが、知れば知るほど「子ども」という生き物の面白さに気がつき、自分が思い描いていた子ども像はいい意味で裏切られ、正しいと思っていた子どもへの対応の危うさにも気がつくのでした。この本は読み返すたびに新しい発見があるし、そういえばこれが出来ていなかったなという自分への戒めにもなるので、本当に繰り返し読んでしまいます。

子どもと過ごす時間が今まで以上に増えているからこそ、もっと子どもへの理解をより深めて、要らないストレスからは解放されたいなと思います。得た知識を基に、ひとつ試してはその成果に一喜一憂しながら、日々実験をするように過ごすのも飽きなくてよいと思います。自分の肩書きとは一見何の関連性もなさそうな本のお話ですが、母として自分が今の自分の大部分であり、生み出す作品にも滲み出ていたりするのかなと思うのです。

- 寄稿協力依頼 -

紙面の充実を図るため、本誌へ執筆・寄稿いただける方を募集いたします。栞日問い合わせフォーム、もしくは weller.hensyu@gmail.com 宛に件名「寄稿協力」とお書き添えのうえ、送信をお願いいたします。こちらから入力フォームをお送りさせていただきます。何卒、ご協力のほどよろしくお願いいたします。なお、寄稿内容はこちらにて一度拝読させていただき、内容によっては掲載をお見送りさせていただく事がありますので、ご了承ください。

掲載順は選者氏名の50音順（敬称略）

編集後記に代えて
- 10年後あるいは100年後にこのフリーペーパーを目にしたみなさんへ -

この『Weller Journal』特別号は、2019年の年末に中国武漢で発生し、2020年の早春には日本を含め世界中で猛威をふるった新型コロナウイルス（COVID-19）が感染拡大を続け、日本全国にも発令された緊急事態宣言を受け、ここ松本でも外出自粛を余儀なくされた中、自宅で過ごす時間をすこしでも創造的なものに変えていけたら、という願いを込めて発行されました。街の店々や公共施設も営業自粛を迫られたため、本来であれば印刷物に仕立てて、街場で配りたかったのですが、それすら叶わず、WEB版のみをリリースしました。みなさんが暮らす時代が、このウイルスの危機を乗り越えた、あるいは、このウイルスとの共生を実現した、あたらしい時代であることを祈って。

責任編集 菊地徹 / 栞日